日本漢文學研究

山岸德平著作集 I

日本漢文學研究

有精堂

山岸徳平著作集 I

日本漢文学研究

著者略歴

明治二十六年新潟県西蒲原郡西川町大字曽根に生る。新潟県師範学校・東京高等師範学校・東京帝国大学国文科卒業。東京女子高等師範学校訓導、学習院教授を経て、東京文理科大学・東京教育大学・学習院大学・実践女子大学・中央大学各教授、東京大学大学院講師・実践女子大学学長を歴任。現在東京教育大学名誉教授・実践女子大学名誉教授・文学博士。

〔主要著書〕「河内本源氏物語研究序説」「懐風藻と日本文化」「校註枕草子」「堤中納言物語評解」「八代集全註」日本古典文学大系「源氏物語」・「五山文学集江戸漢詩集」「源氏物語研究」（共著）など

検印省略

昭和四十七年五月三十日　初版発行

定価　四五〇〇円

著作者　山岸徳平

東京都千代田区神田神保町一ノ三九

発行者　山崎誠

東京都千代田区富士見二―四―十三

印刷所　海外印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町一ノ三九

発行所　有精堂出版株式会社

電話東京（二九一）一五二一～三

振替口座　東京四〇六八四番

郵便番号　一〇一

◇落丁・乱丁はおとりかえいたします。

3391―760851―8610

発刊のことば

国文学界の泰斗山岸徳平先生は、広い学問的領域と深い学殖とをもって、永年にわたり斯界を指導してこられた。しかも喜寿を越えられた現在も倦まずたゆまず、孜々として精進を続けておられることについては、世の学者のひとしく仰ぎみて羨望するところである。その研究分野は極めて広汎で、物語・和歌・説話などの国文学のみならず、日本漢文学・中国文学にも独得の領域を開拓され、文献学・書誌学等々にも数多くの業績を重ねてこられている。

しかし残念なことに、その先生の常に前進することを求めるきびしい学問態度は、論著を刊行することを許されず、『河内本源氏物語研究序説』・『堤中納言物語評解』・日本古典文学大系『源氏物語』『五山文学集　江戸漢詩集』等を除けば、ほとんど雑誌・紀要などに発表されたままで、今日では全く入手出来ないものさえ存在している。これらを結集することは学界・教育界のひとしく鶴首待望するところであった。

先生の学問を慕う私どもは、先生の古稀を機会に著作集の発刊を意図したが、諸種の事情も加わり、先生も安易な公刊を許されず、今日に至った。

今回、先生の喜寿を機会に、「山岸徳平先生をたたへる会」の名において、再度先生に懇願を重ね、

ここについに著作集全五巻の発刊の御承諾をいただき、現在までの山岸学のほぼ全貌をうかがうことができるようになったのは、知友門弟としてこれにまさる喜びはない。

ここに本著作集発刊にあたり、刊行の趣旨を申しのべると共に、先生の今後一層の御研鑽を切に望んでやまない。

昭和四十六年十一月二十五日

山岸徳平先生をたたへる会

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

日本漢文学研究　目次

日本の漢文学……一
日本漢文学史の諸問題……二八
上代漢文学史……四四
懐風藻の成立……七六
懐風藻と日本文化……九四
中古の漢文学……一七三
中古漢文学史……一七八
本朝続文粋に就いて……二三四
作文大躰に就いて……二四九
「泥之草再新」に就いて……二七〇
澄憲とその作品——作文集を中心として——……二八二
海恵僧都と海草集……三一〇
転換期の日本漢文学界……三三七

拈華微笑と笑拈梅花……三四〇
五山文学集と江戸漢詩集に就いて……三五七
宮詞と後藤芝山の宮詞百首……三九四
頼山陽の日本楽府……四二一
藤井竹外の詩集とその桃花水暖……四六二
竹前文庫に就いて……四八二
捩り詩及び狂詩に関する覚書……四九八
所収論文掲載書一覧……五二七

日本の漢文学

日本の漢文学は、日本人の手で述作せられた漢詩や、文学的な漢文の総称である。それには支那文学との比較や翻訳の問題も多く、又、内面外面ともに、支那文学の影響も少くない。私は、今、上代から明治に至るまでの日本の漢文学を、歴史的に鳥瞰し、その間に、万葉集と支那文学の関係を聊か立ち入つて記した。その外には、和歌の隠し題と謎との関係、及び本歌取と集句の詩などに就いて、只、一寸触れて、有志の研究を促したものである。ある部分を取り上げて解説するよりも、この鳥瞰図的なものが、一般には却つて便利であろうと考えたからである。

一　古代から奈良時代

応神天皇の御代に、論語と千字文が伝来したと称せられ、それから、漢字を読む事と書く事が学習せられた。然し、作詩の様な文学作品の盛んになつたのは、天智天皇の頃からであつた。

天智天皇は、内治外交両方面に多くの業績を残されたが、殊に学校を起し、詩文も奨励せられたから、そのために詩人と詩とが多く現われた。然し、それ等は壬申の乱に烏有に帰したものが多く、詩として現存するものは、大友皇子即ち後の弘文帝の作二首が残つて居るに過ぎない。ついで持統・文武両帝の代、即ち藤原宮時代になると、天武天皇や大津皇子や藤原不比等などが、詩人として知られて居る。その頃は、柿本人麿や高市黒人などが、歌界に活動して居た時代であつた。更に、奈良時代になると、外国の使臣の送迎や、貴族間の宴集の詩が目立つて多い。長屋王即ち北宮などは、その中心的存在である。その外には、不比等の子なる房前や宇合があり、石上乙麿やその子なる宅嗣

があり、又、淡海三船などが傑出して居た。宅嗣の芸(ウン)亭は、我が国に於ける私立図書館の最初と言われて居る。奈良時代は又盛唐から中唐に亙る頃で、支那文化も盛んに輸入せられた。この期の作品を集めたものが、懐風藻である。作者六十四人で詩は百二十首、それを作者別とし、又、年代順に記載した。その中には、万葉集中の歌人も二十人餘見えて居る。恐らく、この六十四人の詩人は、殆どすべてが、和歌をも詠じた、所謂、和漢兼作者であつたと思われる。又、別に僧延慶の手になつた鑑真和上東征伝の末にも、日本人の詩の若干が載つて居る。又、万葉集中に見える漢文の序にも、四六文体の技巧を用いた注意すべきものがある。その外、東大寺諷誦文も、後世の願文や表白に連関し、諷誦文学の源流としては、見逃す事が出来ない。又、石上乙麿が、土佐に流された時の作品を集めた銜悲藻は、懐風藻以前のものであるが、現存しない。

懐風藻の詩風、即ち一般に当時の詩風は、漢魏六朝から下つても初唐までの詩を学んだものであつた。初唐はまだ古風を残して居たから、結局、懐風藻の詩の格調は、漢魏六朝風と称すべきであつた。故に、文字面の排列等に苦心し、文字や句に、出典や来歴ある字句を多く用いたり、美辞麗句を用いる点に苦心し、内容の深みや、心情の流露や描写の綿密や、敍景とか情景の融合した如き方面には、微妙なものを見ないのである。その思想も、儒教的なものの外に、老荘や、竹林七賢など清談の徒に関したものなどもある。従つて今日、唐詩選や三体詩などを読む様な、情緒的な湿いの感触を受ける様な事は殆どないのである。

撰者に関しても、古くは淡海三船かと言われて来たが、これも単なる思いつきで、信ずる事が出来ない。この外、撰者に擬せられる人もあるが、何れも推測の域を脱しない。中には、類従本懐風藻の末にある「五言歎老」の亡名氏を、撰者かと見る人もあるが、豈計らんや、この「五言歎老」は、五山の僧の試に記しておいたものと思われる。それが、偶然に本文中に交つたもので、内容からも格調から見ても、時代的に到底、撰者にはなり得ないのである。尚字面の表現技巧は、次の万葉集と漢文学の条に若干述べる事とした。

二　万葉集と支那文学

万葉集中には、懐風藻中の詩人も交つて居る。即ち、和漢兼作の人々は、二十人許り見える。文武帝や、大津皇子や、長屋王や、大伴旅人や、石上乙麿や、山田三方即ち御方の沙弥など、漢詩文をも読み、その造詣の深かつた人は、歌人の中にも勿論少くはなかつたのである。故に、支那文学の影響は、万葉集の中に頗る顕著に見えて居る。たとえば、次の如きはその主要なものであつた。

1 長歌に於ける句法　これには四六文における軽隔句の様式が、大いに影響して居る。対語的なものとしては、古いものに見られるけれども、万葉集の長歌に見る様な整然と軽隔句的になつて居るものはない。然るに、万葉集にその整然たる対句の、然も軽隔句的なのは、四六文の影響を明確に示して居るものである。たとえば、額田女王の春秋の優劣を批判せられた長歌に、「冬ごもり春さり来れば」に続いて

鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ
咲かざりし　花も咲けれど
山をしみ　入りても取らず
草深み　取りても見ず
もみぢをば　取りてぞしぬぶ
青きをば　置きてぞなげく（万一）

などがある。又、人麿の作品などは長いだけに、この句法は一首中に可なり多くなつて居る。たとえば、石見国から妻に別れて京に帰る時の作を見れば、五七を一句として三十九句の中

浦なしと　人こそみらめ
潟なしと　人こそ見らめ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

朝羽振る　風こそ来よせ
夕羽振る　浪こそ来よせ

いや遠に　里はさかりぬ
いや高に　山も越え来ぬ（万二）

の如きものは、十三句を数える事が出来るのである。かゝる例が、万葉集中の長歌には頗る多い。然し、この様な種類の対句を持たないものも、古いものには若干存在する。舒明天皇が讃岐の安益郡に行幸の折に、軍主見山、即ち今日の法勲寺村の楠見山で、お供の人が詠んだ「霞立つ長き春日の」の歌や、持統天皇の時の藤原宮の役民の歌などは、その一例である。又同じ句の反復だけのものも、古い時代のものと思われる作品には、見られるのである。この同じ句の反復は、技巧的に見れば、まだ対句としても、十分に、発達を完成して居ない散文的なものである。

さて、この軽隔句的と言つた対句を見て行くと、一句ずつ隔てゝ対をなして居る点は、全く四六文の軽隔句から来たことは、疑う餘地がない。今、四六文の例によつて、軽隔句を示して見よう。即ち次の如くである。

瓢簞屢空シ　草、顔淵ガ巷ニ繁ク
黎藿深ク鎖セリ　雨、原憲ガ枢ヲ湿ス

これは、平家物語の小原御幸の条にも見え、何人にも知られて居るが、この外に

吹ヲ逐ウテ潜ニ開ク　芳菲ノ候ヲ待タズ
春ヲ迎ヘテ乍ニ変ズ　将ニ雨露ノ恩ヲ希ハントス

隴山雲暗シ　李将軍、家ニ在リ
潁水波閑カナリ　蔡征虜、未ダ仕ヘズ

などを見れば、万葉集における長歌の句法中、軽隔句の影響は、直ちに首肯する事が出来る。軽隔句の逆の重隔句即ち

東岸西岸ノ柳ハ　遅速同ジカラズ
南枝北枝ノ梅ハ　開落已ニ異ナリ

の如き句法は、五七を基調としている万葉集の和歌には、応用不能であつた故に用いられなかつたものと思う。

2 頭韻の音調的可規的用法　頭韻の様に句調を重んじ、又、記載面の視覚上の美しさ、整正さ等を顧慮したものとして、漢魏六朝時代の詩には、同字を順序正しく重ねたり、排列したりする様な表現面の文字の技巧即ち句用字体が、可なり重要視せられたものである。即ち、表現層の深さや含蓄よりも、文字の配置によつて、表現面の可視的とも称すべき方面の技巧に苦心した。今、玉台新詠に見えるそれらの一二の例を掲げておこう。「湘東王ノ春日ニ和ス」と題した鮑泉の詩に

新燕始メテ新ニ帰リ　新蝶マタ新ニ飛ブ
新花、新樹ニ満チ　新月、新輝麗カナリ
新光、新気早ク　……
……
……
……
新扇、新月ノ如ク　新蓋、新雲ヲ学ブ
新タニ落ス連珠ノ涙　新タニ点ズ柘榴裙（巻八）

の如きは「新」の字を整えて排列したものである。又、梁の元帝集に見る春日篇には

春還リテ春節美ナリ　春日、春風過グ
春心日日異ナリ　春情処々ニ多シ
処々ニ春芳動キ　日日、春禽変ズ
春意ハ春已ニ繁ク　春人ハ春ヲ見ズ

……　　……

独リ思フ春花ノ落ツルヲ　　マタ似タリ春時ヲ惜シムニ

の如きものや「春日、綉衣軽ク　春台、更ニ情有リ云々」などがある。これらは「春」の字を整えて排列したものである。この様な例は、万葉集の中にも歌序に例を見る事が出来る。即ち、大伴家持が大伴池主に贈つた悲歌二首等の序には、

……方今、春ノ朝、春ノ花ハ　馥ヲ春ノ苑ニ流シ
　　春ノ暮、春ノ鶯ハ　声ヲ春ノ林ニ囀ル（万一七）

の様なのがある。何れも、漢魏六朝時代に、好んで用いられた表現の智的技巧である。この種の例は甚だ多いが、それは懐風藻の詩人にも勿論、影響を及ぼした技巧であつた。例えば、藤原不比等の「遊吉野」の詩には

夏身、夏ノ色古リ　　秋津、秋ノ気新タナリ

の如くに見え、春日老の「述懐詩」には

花ノ色ニ花ノ枝染マリ　　鶯ノ吟ニ鶯ノ谷新タナリ

の如きがある。又、釈辨正が「在唐、懐本郷」の詩には

日辺ニ日本ヲ瞻　　雲裡ニ雲端ヲ望ム
遠ク遊ビテ遠国ニ労シ　　長ク恨ンデ長安ニ苦シム

などもある。これらの如く、一句に就いて見れば、同じ文字の間に一字又は二字を挾んで、その挾んだ文字に迫る様になつて居るもの、即ち挾んだ文字に擬するものをば双擬対と言い、それは文鏡秘府論などにも、詳しく説明せられて居る。文鏡秘府論の例に就いて言えば、次の如きものがあげられる。

夏暑クシテ、夏衰ヘズ
秋陰リテ、秋未ダ帰ラズ

月ヲ議スレバ、眉ハ月ヲ欺キ
花ヲ論ズレバ、頰ハ花ニ勝ル

琴ハ、清琴ヲ命ジ
酒ハ、佳酒ヲ追フ

とに角、この様な、表現面の智的技巧は、万葉集にも、次ぎの如くに見られるのである。

よき人のよしとよく見てよしと言ひしよし野よく見よよき人よく見（万一）…（よ）

来んといふも来ぬ時あるを来じと言ふを来んとは待たじ来じと言ふものを（万四）…（こ）

秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋の露おけり（万八）…（あ）

大宮の内まで聞こゆ網引きすとあごとゝのふるあまの呼び声（万三）…（あ）

これ等の技巧を、漢詩の影響の点から考察すれば、比較文学的の資料としても、重要なものとなる。然るに、漢詩の背景なしに、和歌のみに就いて考えれば、これらは、由つて来たる所も不明で、只、言葉の遊戯に堕した、一層浅薄なものとなつてしまうのである。

この外に、「海若」を「ワタツミノカミ」と読ませ、「霰霙」を「コサメ」と読ませた様な、用字の例も少くない。これらは、用字に苦心した点で、漢魏六朝の詩人達が「山水」を「智山仁水」と表現した様に、表現面の可視的とも称すべき点の苦心であつた。同時に又、これを用いた人の学問の素養とか造詣が、窺い知られるのであつた。即ち「海若」は荘子第十七秋水篇にある「北海ノ若」で「若」は北海の神の名であつた。霰霙は詩経の小雅の信南山の篇の第二章に

上天ニ雲同（アツマ）リ　雪ヲ雨（フ）ラスコト零々タリ
之ニ益スニ霰霙ヲ以テス　既ニ優ニ既ニ渥シ

とあつて、霰霙は「コサメ」である。これは倭名鈔巻一の風雨部にも出て居て、「小雨」の義になつて居る。

3 内容の影響　表現面に於ける、文字排列の智的技巧と同時に、又、表現層の部分にも影響が少くなかつた。山上憶良が「惑へる心を反さしむる歌一首並に序」の如きもその一つである。これは、道教にかぶれた清談の徒の様に、この世を去つて、山沢に亡命してしまおうとする考を、正常な心に反らせようとしたものである。そのためには、儒教の三綱五常を教え、家に居て真面目に家業を励み、父母妻子を扶養すべき事を教えて居る。又、道教で扱う仙人を詠んだものに、次の如き作品もある。

とこしへに夏冬行けや皮衣扇放たぬ山に住む人（万九）

その外、張文成の遊仙窟の影響も顕著である。今その一例をあげて見る。即ち、張文成が、十娘を恋いつゝある心情を

……木栖(アヅサ)ノ山ノイタダキニ出ヅ。相思フコト日日ニ遠シ、未ダムカシヨリ、炭ヲ飲ムト思ハザツシニ、腸ノ熱イコト焼クガ如シ。刃ヲ呑ムト思ハザレドモ、腹ノ穿ルルコト、割クニ似タリ

と記して居るが、それを用いて

夜のほどろ出でつゝ来らく度まねくなれば我が胸きり焼く如し（万四）

と詠んで居る。更に、張文成が、十娘に別れてから後、悲愁に耐えかねた頃の状を

……比目ノ対ヘルヲ絶チ・双ベル鳧(カモ)ノ伴ヲ失フ。日ニ日ニ衣寛ビ、朝ナ朝ナ帯緩ブ

と記して居るが、これを用いて

一重のみ妹が結ばん帯をすら三重結ぶべくあが身はなりぬ（万四）

と詠んで居る。尤も、この様な表現は、必ずしも遊仙窟のみでもない。玉台新詠巻八には、前にも掲げた鮑泉の寒閨詩に

行人ノ消息断エ　空閨静カニシテマタ寒シ
風、急ニシテ朝機噪シク　鏡闇クシテ晩粧難シ

従来、腰自ラ小ナリ　　衣帯、中ンヅク寛カナリ

などもある。衣帯の寛かになる事は、詩には必ずしも珍しくない。但し、「一重のみ」のは、大体、遊仙窟を読んだ人の作と考えられる。又、張文成が十娘に別れて後に、うたゝ寝をして、さめた時の事を記して

……シバラク座シテ睡レバ、則チ夢ニ十娘ヲ見タリ。驚キサメテ、カキサグレドモ、忽チニシテ、手ヲ空シクシ、心ノ中カナシク、マタ何ヲカ論フベケン

とあるのを用いて

夢の逢ひは苦しかりけり驚きてかきさぐれども手にもふれねば（万四）

と詠んで居る。これらの外に、仏教思想も詠まれて居るが、それ等は省略する。

4 問答体の和歌　これは、即興的な性格を持つものであるが、その名称から考えても、矢つ張り支那文学の影響から来たものである。これは、万葉集中、各所に散在して居るが、巻十一・十二・十三などには、纒まつて載つて居る。今それ等の例から掲げて行く事とする。

（すべもなき片恋をすとこの頃にあが死ぬべきはいめに見えきや……女
（いめに見て衣を取り着よそふ間に妹が使ぞ先だちにける……男

（門たてゝ戸もさしたるを何処よか妹が入り来ていめに見えつる……男
（門たてゝ戸をさしたれど盗人の忍れる穴より入りて見えしを……女（以上万一二）

この様なものが、更に複雑化すると、長歌と短歌の問答にもなる。念のために、その一例を左に掲げておく。

こもりくの　初瀬の国に　さよばひに　吾が来れば　棚曇り　雪は降り来ぬ　さぐもり　雨は降り来ぬ　野つ鳥　きゞしはとよむ　家つ鳥　かけは鳴く　さ夜はあけぬ　入りてあがねん　この戸開かせ

反　歌

こもりくの初瀬小国に妻しあれば石は踏めども猶ぞ来にける……男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com